

《コース》 7.5km

離別所 — 弘文天皇長等山前陵 — 新羅善神堂 —
大津宮跡 — 近江神宮 — 百穴古墳 — 南滋賀廢寺跡
— 崇福寺跡 — 離滋賀里…解散

《 総 説 》

【 近 江 国 】

「近江」即ち「近つ淡海」。波静かに陸地に囲まれた海だから「江」とあてたのであろう。これに対して「遠つ淡海」は浜名湖を指した。即ち「遠江」である。

有史時代の日本の歴史は、主に五畿内を軸として動いたと言える。近江国はその東北に隣接し、東国、北陸への関門であった。東より来たって畿内を制覇せんと欲すれば、まず近江の国を制して手中に納めねばならず、西より来る者もまず近江国に確固たる防衛線を張らねばならなかった事は、日本史が雄弁に物語っている。

特に湖南は、東国、北陸への交通の要衝であった。湖東が芦繁き湿潤の地であり、河川は度々氾濫したので、従って古代の交通は、主として湖西即ち比良山麓の道であったからである。果たして湖南の地は、古代帝王の都の地ともなった。

¹²景行天皇58年記

春2月天皇近江に幸し、志賀に居ます3年。これを高穴穗宮たかあのうという。¹³成務天皇高穴穗宮あのうもあつた。穴穗神社が穴太あのうにあり。天智天皇も称制6年(667)3月近江大津宮に遷都す。

近江国の国府が湖南の瀬田におかれていたことは、昭和49～50年の発掘調査によって明らかにされた。

古代史散策

No. 15

近江国① 湖南
まぼろしの大津京

パナソニック電工松寿会
古代史散策部

昭和54年11月作成
平成14年10月3刻
平成27年4月4刻

【琵琶湖】

面積……675.27km² = 2億425万9175坪
周 囲……253.2km 大津～浜松間とほぼ等しい
最大深度…103.58m 平均深度……41.2m
標 高……85.614m (大阪湾干潮時の海面より)

※大阪城天守閣の高さと同じ

貯水量……275億立方米

日本列島は、2300年前頃ほぼ現状の形となったといわれる。その後なお続いた造山活動により、巨大地盤は列島の弧の内側に沿い亀裂陥没し、1300～800万年前にかけて泥砂がこれに堆積し、その割れ目から酸性マグマ(花崗岩)が上昇し、周囲の土地は隆起して次第に山脈(比良比叡系、鈴鹿系等)となり、取り残された窪地に水が溜まった。この陥没湖が琵琶湖である。

現在より僅か4～5千年前でさえ、湖東は鈴鹿山麓まで湖底であり、広さは今の2倍はあったが、鈴鹿山脈を水源とする河川の運ぶ土砂が堆積して次第に浅くなり、一面の芦原と化し、やがて北九州より移り来た安曇海洋族がもたらした、稲作文化が弥生時代に至り定着した。

琵琶湖は、少なくとも2回の陥没により出来た複成湖である。水深70mの等深線を結ぶと、長命寺から近江舞子にかけてや、浅く、深所が南北2ヶ所にある。北部の最深部は103.58m、これが主湖盆で南部の副湖盆の最深部は76mである。

前出の如く近江国は、交通運輸のまた軍事上の要衝であり、且つ 有数の穀倉地であったから、天皇家のみならず、古代の中央大豪族 物部氏、和迹氏等も早くからこの地に進出し、先住民を放逐或いは輩下に組み入れて勢力を張った。また渡来系でも特に強力であった天日槍

の率いる集団や京都盆地^{かどの}葛野に勢力を張った秦氏、後漢王族を称した丹波史氏等も進出してきた。秦氏は湖東の中心部付近まで、丹波氏は南郷、石山一帯の古市郡まで浸入し蟠踞していたと思われる。

特に湖南の旧滋賀郡錦織郷(大津、山上、漣、錦職一帯)滋賀郷(南滋賀、滋賀里、穴生、阪本一帯か)及び大友郷(阪本、雄琴、堅田、仰木一帯か)は、渡来系の勢力下にあったと思われる。

錦職村主(漢人波努志^{にしごりのすくり}の後裔と云う)や錦部村主は、飛鳥^{あすか}松前^{ひのくま}に入った阿智使主^{あちのおみ}の一党であり、近江にも分置したという。「和銅6年(712)近江国などに始めて綾錦を織らしめた」とあり、この地に優れた渡来系の機織り技術が伝承していたからであろう。

後漢王族系を称した大友漢人は、大友村主を族長とし後に志賀忌寸^{しがのいみき}の姓を賜わった…推古10年(602)記。百濟僧勸勒^{かんろく}に天文遁甲の術を学ばせた、大友村主高聰^{たかふさ}もその一族で、中央官人の知識人であった。三井寺はその氏寺として創建したもので、大友皇子(弘文)の子孫創建との伝えは明らかに誤伝である。

現在も阪本の一角には「大友」と名乗る家並が続く。

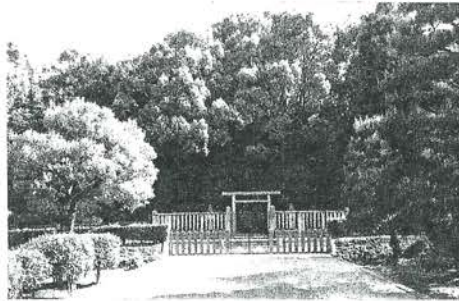
〈 各 説 〉

【³⁹弘文天皇(大友皇子)長等山前陵…旧亀岡円丘】

大津市御陵町

日本書紀は大友皇子の即位を記せず、明治3年になって、その立太子、即位を認めた大日本史により、弘文天皇号を追諡し、御陵をこの地に比定した。

大友皇子は、天智帝と采女の伊賀宅子との子で、母宅子が卑母のため、当時の慣例では皇位継承の資格はなかったが、天智には皇位継承の皇儲に恵まれず、実弟大海人皇子を事実



弘文天皇陵

上の皇太弟として、半ば政務を任せていたにも拘らず、天智天皇10年(671)正月大友皇子を太政大臣に据え、次代天皇としての資格を整えた。天智崩御同年12月3日。このため後世の史家は「天智天皇は、その死期を悟るにつれ、子の愛に溺れた迷いの現われ」と解しているが、その通りと思われる。

「天智崩御に先立つ10月17日 大海人皇子は、病床に召され、皇位譲渡を打ち明けられるも固辞し、直ちに内裏の仏殿に入って剃髪、19日吉野に脱出。翌672年6月14日 大海人皇子吉野を発して東国に向かい27日不破に陣す。美濃、尾張の兵2万3千人とある。7月2日 近江京に進撃し、22日最後の激戦、23日栗津陥落し弘文天皇山前に隠れる。群臣散亡し従う者若干。ついに山前に自縊。大海人側諸将、24日不破行宮に凱旋し、弘文天皇の頭を献った。この戦いで大津宮全焼す」これが名高い「壬申の乱」である。

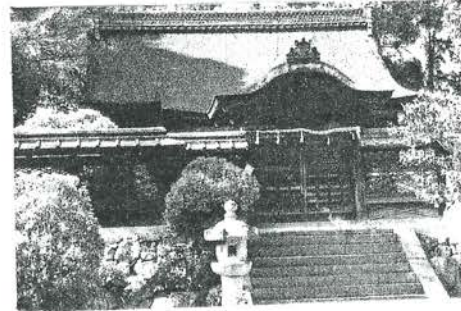
【新羅善神堂：国宝】

大津市園城寺町

園城寺（三井寺）鎮守社の一つである。三間社流造の神社本殿は園城寺最古の木造建造物で、足利尊氏が貞和

3年(1347)に再建した。もとは、新羅明神社、新羅社と呼ばれていたが、明治初期の神仏分離により現在の名称となった。

平安時代作の本尊木造新羅明神は、僧円珍が入唐求法の



新羅善神堂

の旅から帰国する途中に現れ、その教法を守護することを誓ったとされ、円城寺の守護神として崇敬を集めた。明神を素佐男とするのは訛伝。おそらく韓神、曾富理神、白日神、日知

(聖)神と古事記に載る、白知神を祀ったのではなからうか。古え大友村主一族が祀ったのであろう。

新羅明神と源氏との関係は深く、源頼義（河内源氏）は、三男義光をこの氏人として元服させ、新羅三郎義光と名乗った。これが甲斐源氏の祖であり、近くに義光の墓が現在も残っている。

【大津宮跡】

大津市錦織



大津宮跡

37天智天皇が、白村江の戦い(663)の後、難波宮に孝徳天皇を残したまま、大津へ遷都したことは『日本書紀』に見えている。しかしその場所を特定すること

は、御所之内遺跡という地名により推定されているだけであった。

昭和49年、民家の建て替えによる発掘調査で、巨大な柱跡が7本見つかかり、大津宮跡と確定され「近江大津宮跡遺跡」として国史跡に指定された。

この地はやがて天智天皇の死後、古代史の重要な転機になった「壬申の乱」の舞台となっていくのである。

【近江神宮】

大津市神宮町

昭和15年。時あたかも皇紀2600年にあたり、我が国中興の英帝天智天皇の偉業を顕彰すべく、此处宇佐山山麓の地を卜して近江神宮が創建された。境内の広さ6万坪(1986㎡)我が国で初めて漏刻(水時計)を設置し、時刻を知らしめられた事を記念して時計博物館を境内に併設し、また、百人一首の第一番歌が天智天皇の御製であり、これを縁に毎年正月、歌かるたの選手権試合が挙行されている。

中大兄(葛城皇子)は実母斉明天皇と共に、西暦660年に一旦は滅亡した百済の再興に力を貸し、朝鮮半島への出兵を指揮すべく筑紫の朝倉宮に幸されたが、同年7月24日女帝は行宮に崩御。皇太子は踐祚せずその後6年間政務を執られた。即ち「称制」である。

天智称制2年(663)我が軍白村江で唐軍に大敗。陸奥の蝦夷たびたび反乱し、内



近江神宮

外多事多難。中大兄は、この難局を沈着冷静にしかも断固として処理せられ、浮沈の瀬戸際だった皇運を回復。文化の興隆にも意を注がれて、縦横に政治の手腕を発揮せられた偉業は、英明の天子なればこそであった。

天智称制6年(667)春3月。かねてより準備をすすめた近江湖東滋賀郡に都を定めて遷都を断行、大化改新以来の懸案であった旧豪族の残党の力を削ぎ、国防を充実し、国家の安定を図られた。翌年(668)ようやくにして即位。³⁸天智天皇である。

【南滋賀廃寺跡】

大津市南滋賀

曾祖父天智天皇の遺徳を殊のほか敬慕された桓武天皇は、奈良の都を棄て山城国乙訓郡の長岡京に遷都された。2年後、延暦5年(786)廃絶の大津京に造営された梵釈寺跡かとも、天智天皇創建の崇福寺跡かとも云われてきた。(崇福寺跡は、ここより西北の山中の廃寺であることが確認されている)

この地は正興寺を中心に、以前から古瓦が出土することで知られ、昭和3年の一次調査に続いて、同13年の発掘調査によって、僧坊-講堂-金堂が南北に並び金堂前に東西に塔を持つ、薬師寺式伽藍配置の寺院跡であり、伽藍を取り囲む回廊跡の一部も発見された。双塔と金堂は見事な瓦積み基壇、講堂は自然石を並べて囲んだ基壇上に建てられていた。

出土瓦の一部は、平安中期頃のものもあったが、多くは重厚な複弁蓮華文の丸瓦で、この寺院の創建は白鳳時代(673~)前後であろうと云われる。従って桓武天皇創建の梵釈寺と云うのは当たらない。

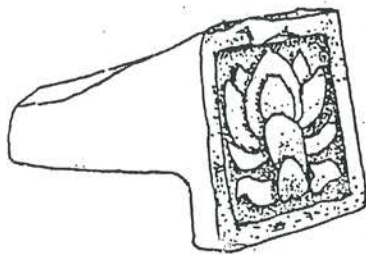
出土瓦中特に注目すべきは、極めて古拙素朴な変形蓮

華文を持つ角形軒瓦と平瓦である。瓦積基壇にも使われており、従って寺院以前の瓦である所から、第二次の調査者は、これこそ大津京宮殿のものかと推論した。しかしこの角軒瓦は、上代瓦のイメージからは凡そかけ離れていて、天智朝前後の瓦の常識外で、さらに近年ずっと北の穴太遺跡などからも同類の角軒瓦が出土しているから、大津京宮殿に用いられたとする説は早計と思われる。

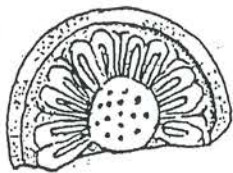
思うにこの地一帯は、古来より渡来系部族入植の地で彼等が富み且つ栄えていたことは、彼等が残したおびただしい数の墳墓からも察せられる。彼等は主に百済を通じて学んだ、大和系の大陸文化と異なる文化を有していたのではあるまいか。さすればこの南滋賀廢寺跡の建立より以前に、彼等が造営した建造物に用いられた瓦と推論するほうが、遙かに妥当性があると思えるのである。

やはり白鳳寺院も謎の寺、大津京もまぼろしの都なのであった。

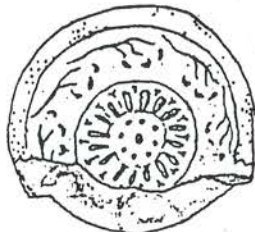
軒丸瓦図



変形蓮華文方形軒瓦



複弁蓮華文軒丸瓦



流雲文軒丸瓦



単弁蓮華文軒丸瓦

【百穴古墳】

大津市滋賀里町

その名称から、崖に穴を開けた群衆墳を想像しがちであるが、



百穴古墳案内板

ここは、湖西一帯の群衆墳と同じく、朝鮮半島の古代の墳墓と共通の特徴であるドーム型天井の、横穴式石室の円墳の集まりである。竹藪の中に点々と存在し、いくつも確認することができる。

石棺などは残っていない

が、古墳時代後期、この地に渡来人が住み、生活していたことは、土器などの発見で明らかで、古代の人々の息吹きを感じられる場所である。

【崇福寺跡：国史跡指定】

大津市滋賀里町

寺跡確定までは、見世山中廢寺跡とも云われていた。

天智帝 大津宮の夜の夢に法師が出て「乾の山に靈窟あり」と告げた。目覚めればその山に火の光赤く、尋ねれば深々たる山谷に小山寺あり、念誦の優婆塞は、ここが「佐々名実長等山」と告げて消えた。翌天智7年(668)この地に崇福寺を建て、帝は左手の無名指を切り、燈炉の下の石臼の内に納む……扶桑略記天智6～7年条



崇福寺跡